

ある男勝りな女性の奮闘記

—女性部が躍動する浜を目指して—

蓬田村漁業協同組合
女性部 大宮千恵子

1. 地域の概要

蓬田（よもぎた）村は北緯 41 度、東経 140 度 40 分に位置する。隣接する青森市から北へ約 20 kmにある津軽半島中部の人口 3,000 人の村で、総面積は 80.65 km²、西に津軽山地がそびえ立ち、東に陸奥湾が広がっている。

津軽山地から流れる川からは、ホタテガイの餌となるプランクトンを育てるミネラルたっぷりの水が注ぎ込み、潮流が緩やかで静穏性が高い陸奥湾で行うホタテガイの養殖は、村の基幹産業となっている（図-1）。



図-1 蓬田村の位置図

2. 漁業の概要

私たちが所属する蓬田村漁業協同組合は 72 人（正組合員 47 人、准組合員 25 人）で構成され、瀬辺地（せへじ）漁港と蓬田漁港の 2 漁港があり、組合員のほとんどはホタテガイ養殖を営んでいる。平成 28 年の漁獲数量 5,267 トン（漁獲金額 9 億 6,772 万円）のうち半会員ホタテの割合が漁獲数量の 95%（漁獲金額の 85%）を占め、次いで会員ホタテとなっている（図-2、3）。

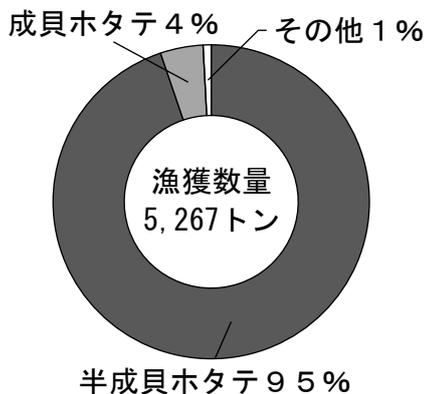


図-2 平成 28 年漁獲数量の割合

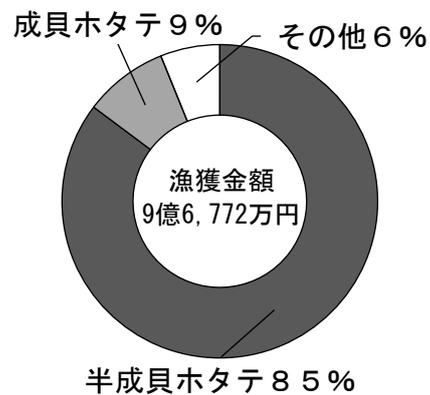


図-3 平成 28 年漁獲金額の割合

そのほかに、定置網でヒラメ、タイ、アンコウ、イワシ、刺網でカレイ、ナマコ桁網でナマコ、カニ籠でトゲクリガニを漁獲している。

また、村が平成 27 年 5 月に県内自治体初のホタテガイ養殖残渣堆肥化処理施設を建設し、漁協はその施設の指定管理者として運営を行っている。

3. 研究グループの組織と運営

平成 17 年 5 月に蓬田村漁協女性部は部員 10 人で結成した。

結成当初、私たち女性部は漁協の事が全くわからなかったなので、その組織づくりから勉強を始め、理事会や総会の傍聴、ほたて漁業者会議、半会員の入札会などいろいろな場に参加することができた。これにより漁協事業に対して興味や関心を持つようになり、関係者に女性の声を届けることができた。

現在部員は 14 人で、役員は部長 1 人、副部長 2 人、監事 2 人で構成されており、部員からの会費、助成金及びその他収入で運営している。

主な活動は、養殖残渣の有効利用を含めたホタテガイ養殖の安定生産及び消費拡大宣伝活動（村民祭、玉松海まつり、子供会）、漁港美化活動（花壇づくり）、心と体の健康づくり、漁船海難遺児募金活動、研修旅行である（写真－1）。



写真－1 研修旅行（研修先：大間漁協）

4. 研究・実践活動取組課題選定の動機

養殖籠等に付着したムラサキイガイやキヌマトイガイなどの生物をいったん陸上に持ち込んだ場合は、「養殖残渣」（養殖行程において養殖施設等に付着するほかの生物などの不用物）として一般廃棄物となり、適正に処理する必要がある。養殖残渣は、時間がたつと悪臭を放ち、地域住民から多くの苦情が出るだけでなく、養殖籠の洗浄作業をしている私たちでも顔を覆いたくなるほどのものであった。これまでは村外の焼却施設に運搬し、処理していたが、その労力と費用が漁業経営の重い負担となっていた。このような中であって、養殖残渣の不法投棄事案が発生したことから、出荷時や沖での仕事なども絶えず見張られている気になり、こんな状態では後継者など育つはずがないと心底思うほど、つらい時期が続いた。

このように、私たちにとって養殖残渣の処理は大変な問題であったが、村が平成 27 年 5 月にホタテガイ養殖残渣堆肥化処理施設を建設してくれたことで、状況は大きく変化した。

また、組合員の高齢化が進み後継者不足に悩まされている中、身体が資本のはずが、健康面に無頓着な組合員も多いことから、生活習慣の見直しが不可欠であると痛感していた。

最近是他産地のホタテガイ生産量の低迷から陸奥湾産ホタテガイの価格が良いが、いつ状況が変わるかもしれない、資材の値上がり、頻繁に発生するへい死被害と経営の課題もたくさんある。

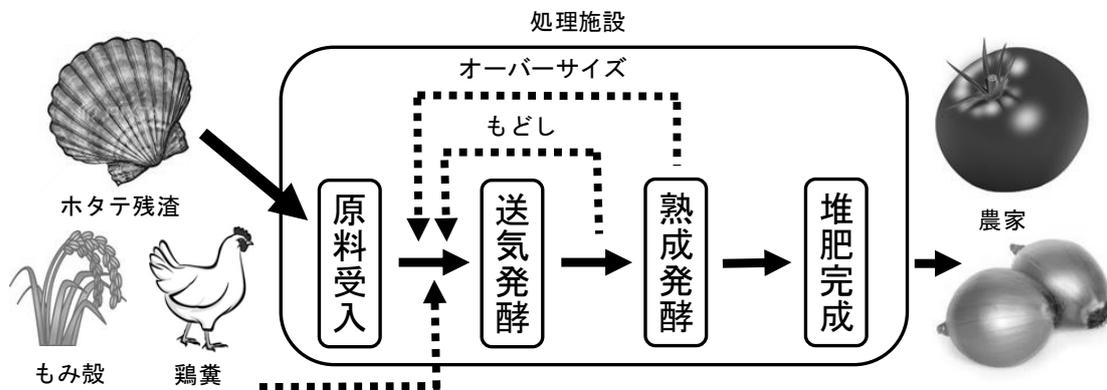
漁協や漁業者が抱えるこれらの問題に私たちも何かできないかとの思いから、養殖残渣の有効利用や担い手づくり、魚食普及、健康対策及び地域の活性化に取り組むことにした。

5. 研究・実践活動状況及び成果

(1) 養殖残渣の有効利用

村は、養殖残渣の不法投棄事案を重く受け止め、養殖残渣処理対策を緊急の課題ととらえて、養殖残渣堆肥化処理施設建設に動き出した。国の補助や県の指導を受け、構想からわずか2年、平成27年5月に施設が完成した。蓬田村ホタテガイ養殖残渣対策協議会が設立され、堆肥化処理施設の検討が行われることになり、事前に漁協内での検討会が開かれた際には、女性部として、使い勝手や堆肥の活用法等について大いに意見を述べた。その意見が反映された施設は、全国に誇れる養殖残渣のリサイクル施設になったと自負している。

養殖残渣は、鶏糞、もみ殻を混合して、発酵処理し、3～4カ月後にはホタテ堆肥（品名：蓬田ホタテ堆肥〈写真－2〉）になる(図－4)。



図－4 蓬田ホタテ堆肥の製造工程

しかし、堆肥化処理を毎年継続するには、生産したホタテ堆肥を全量配付して施設を空ける必要があり、当初は配付先の確保に苦労した。

そこで、配付先拡大のために、まずは女性部が使って効果を確認することとした。今までは化成肥料やもみ殻堆肥を購入して利用していたが、漁協花壇にこの堆肥を入れ、マリーゴールドやベコニアを植えてみたところ、きれいな花たちが咲き乱れ、肥料としての効き目を実感した(写真－3)。また、花壇を見た他の自治会からはどんな肥料を使ったら、こんなきれいな色の花が育つのかと驚きの声があがった。効果を実証できたので漁協女性部と地区婦人会で構成する郷沢(ごうさわ)地域水土里(みどり)保全隊の花壇にも入れ、ホタテ堆肥を使った花畑という看板を立てPR活動している(写真－4)。

ホタテ堆肥の効果が口コミで広まり、現在は試行品として無償配付していることもあって、配付の要望が非常に高い。



写真－2 蓬田ホタテ堆肥



写真－3 漁協花壇



写真－4 郷沢地域水土里保全隊花壇看板

平成 28 年はホタテ堆肥を村内農業者延べ 137 人に 380 トン、村外農業者延べ 152 人に 497 トンの合計 877 トンを無償配付したが、それでもなお、村内外の農業者延べ 10 人分の需要数百トンに応えられず、うれしい悲鳴となった。

漁家の悩みの種であった養殖残渣が有効資源として生まれ変わり、役に立つ存在となったことに喜びを感じている。

(2) 担い手づくり

私たちがこだわり、手間暇かけて育てたホタテガイは甘みがあり、濃厚な味わいであるが、スーパー等の店頭で並ぶと値段が高く、地元の子供たちが食べる機会も少ないと感じていた。また地元では、ホタテ漁家の子供であっても、ホタテ養殖のことを知らない子供が多いことも分かった。そこで、5 年前から蓬田中学校 1 年生にホタテガイ養殖体験学習を行っている。

当日は、まず蓬田村漁業研究会が養殖籠引き揚げ作業、選別作業などの漁業体験を指導する。その後、女性部が中学校の家庭科室でホタテガイのむき方（通称：ほやき）を教え、生徒がむいたホタテガイで刺身、フライ、バター焼き、みそ汁をつくり、生徒と一緒に試食する。体験が終わって中学校から届いた生徒の作文、個人新聞には「ホタテの作業のことが良く分かった」、「蓬田のホタテはおいしい」、「ホタテをもっと食べたい」、「ホタテ料理を自分でも作りたい」などの感想が多かった。体験した生徒たちの中からホタテガイづくりの面白さ、おいしさを知って、ホタテガイ養殖をしたいと思う子供たちが出てくることを願っている（写真－5）。



写真－5 蓬田中学校ホタテガイ料理教室

(3) 魚食普及

平成 29 年 2 月に県事業で生活協同組合コープあおもりの組合員を対象に、ホタテ刺身、フライ、バター焼き、みそ汁の他にもあえ（卵、外套膜（通称：ヒモ）とほぐし身のみそあえ）、カルパッチョの料理教室を行った（写真－6）。ホタテをむいたことがない参加者が大半で教えるのは大変だったが、消費者の反応が新鮮でもあった。



写真－6 コープ青森ホタテガイ料理教室

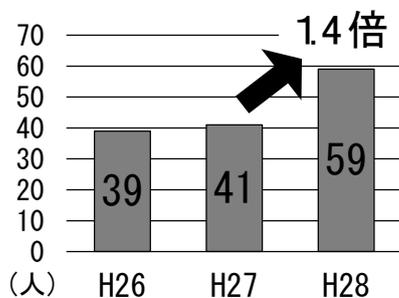
ともあえを知らない人が多く、卵とヒモをフードプロセッサーですりつぶすことで滑らかになるというコツの伝授とみその味付けが好評であった。このため、このような浜の伝統料理の商品化もいいのではと思っている。

参加者からは「バター焼きはオリーブオイルでいいんじゃない」、「薄味にしてホタテガイのおいしさを引き立てて」との意見も頂いたので、今後は洋風料理のレパートリーを増やしたり、プロの先生からの指導も受け、ホタテ料理教室を充実させたいと思っている。

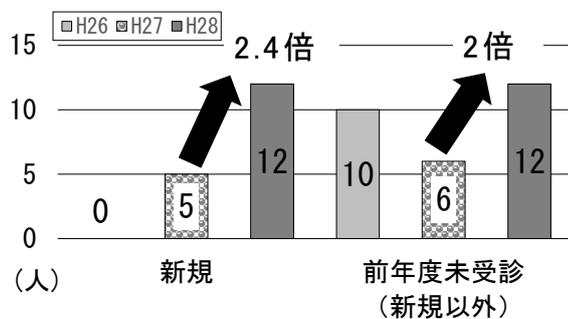
(4) 元気に働く世代づくり

私たちと活動を共にしていた女性部の仲間が平成 25 年にガンで亡くなった。翌年にも働き盛りの漁協組合員が相次いでガンで亡くなり、最年少は 40 歳という若さであった。また、脳血管疾患で入院している組合員もいる。

村の調査では、住民健診受診率が低いこと、ガン検診を受けなかった 40～60 歳代のガンによる死亡率が高いことが分かった。このため、私たちは、村主催の職域を対象とした働き盛り世代のための健康づくりセミナーや、漁協での健診結果説明会に参加し、組合員とその家族の受診率向上を呼び掛ける取り組みを行った。この結果、平成 28 年度の組合員とその家族の住民健診受診者数は平成 27 年度の 1.4 倍、そのうち、新規受診者は 2.4 倍、前年度未受診者は 2 倍と大きく改善した（図－5、6）。



図－5 住民健診受診状況
(蓬田村漁協)
出典：蓬田村住民健診実績



受診状況 (蓬田村漁協)
出典：蓬田村住民健診実績

この好循環の維持のため、私たちは、受診後の健康教育兼特定保健指導（村主催「漁師さんのためのはつらつ健康講座」）へ組合員の参加を促し、働き盛り世代が生活習慣を見直してはつらつと働ける健康づくりに取り組んでいる（表－1）。

表－1 漁師さんのためのはつらつ健康講座計画

実施日	平成28年12月9日（金）	平成29年1月10日（火）	平成29年2月3日（金）	平成29年3月6日（月）
会場	漁協2階	ふるさと総合センター	ふるさと総合センター	ふるさと総合センター
対象者	特定保健指導対象者を含む、漁協全組合員とその家族			漁協・農協女性部
テーマ	ご存じですか？ メタボリックシンドローム メタボ・腹囲測定（講話） たばこについて（講話）	栄養教室（講話） みそ汁等試食	運動教室（講話） チューブエクササイズ指導	栄養のお話 料理教室
講師	保健師（役場・保健所）	管理栄養士（保健所）	健康運動指導士 （小泉 洋先生）	管理栄養士（保健所）
ねらい	メタボは生活習慣病予備軍であることを知る。 禁煙の重要性を知る。	メタボと食生活の関係を知る。 だしの活用で、塩分濃度を減らせることを知る。	メタボと運動の関係を知る。 家庭でできる運動習慣を知る。	健康と食事の関係を知る。 バランスのよい食事の作り方を知る。

（5）活躍する女性との連携

私は、平成17年に指導漁業士に認定され、県漁業士会の研修会、交流会に参加してきた。このほか、漁業に従事する女性との広域的な交流の場として東日本女性漁業士交流会がある。昨年の交流会には青森県から9人の女性指導漁業士が参加した（写真－7）。この交流会は岩手県と宮城県の2県でスタートしたが、青森県、茨城県、千葉県と輪が広がり、他県との情報交換の場として大いに役立っている。東日本大震災で被災した岩手県の漁業士からは「船が流され、せつかく育てた後継者は生活の場を求めて家を出ていき、今後、帰ってきて漁業を続けるか心配だ。仮設住宅に住んでいるが、仲間に会いたくて来た」と言われ、身につまされた。また、後継者問題や漁家としての問題には他県の参加者から多くの有益な意見をもらった。



写真－7 東日本女性漁業士交流会

これから青森県の女性漁業士の仲間と力を合わせて活動していくほか、他県の仲間との交流も大事にしていきたい。

6. 波及効果

村に養殖残渣堆肥処理施設が完成し、安心してホタテガイ養殖作業に従事できるようになったことから、後継者も増えた。養殖残渣の汚れや臭いが解消されただけでなく、焼却しない、環境にやさしいリサイクル施設であり、地域の環境維持にも貢献している。さらに、私たちのPRの結果、ホタテ堆肥の配付も順調で、養殖残渣はやっかいものではなく使えるもの、と地域住民、農業者のイメージを一新できたことは大きい。

また、私たちの料理教室は、地元の子供たちが漁業の担い手になるためのお手伝いとして地元の期待も大きく、これからも続けることとしている。

加えて、消費者向けの料理教室は、私たちにとっても魚食普及の勉強になった。ホタテガイ養殖業を知らない子供たちやお母さんが「女性部のみなさんは調理がスムーズだ」、「ホタテは嫌いだったけど好きになった」、「ホタテをもっと食べたい」と言ってくれたことがうれしく、頼もしく、ヤッタ！と感じた。

住民健診についても、受診率向上に取り組んだことが病気の早期発見と早期治療につながり、働く世代とその家族が安心してホタテガイ養殖を続けることができている。

女性漁業者との交流では、仕事の話だけではなく、女性の悩み、心配事を語り合ったほか、後継者問題等の情報共有もできた。

私たちの活動はこれらの全てがまとまり、地域の活性化に結びついているものと自負している。

7. 今後の課題や計画と問題点

生産したホタテ堆肥は好評で、タマネギ、トマト栽培に使われ、また、ハウレンソウなどの葉物野菜には効果きめんと言う人もいる。私は、もっと多くの農産物に利用できるようにとソバにも使ってみたが、これは今一步であった。来年、再チャレンジして効果を確かめ、さらに多くの農家が使えるようにしたい。

現在、ホタテ堆肥は希望者が施設に取りに行くが、直接、取りに行けない方々にも使ってもらうためにも、漁協前に場所を設けるなどの配付手段を考えたい。

しかしながら、ホタテガイ養殖残渣はやはり少ないほうがいいので、養殖残渣のより一層の軽減につながる技術の確立を願っているところである。

地域の働く世代の健康づくりは始まったばかりである。元気で働くためには継続的な受診が大切であり、これからも組合員とその家族に健診や健康セミナーへの参加を呼び掛けて健康第一漁協を目指していくつもりである。

私はJA青森女性部蓬田支部長も兼務しており、日頃から、漁業と農業の連携を模索している。これからは地域内の女性の農水連携をより深め、販売、加工についても消費者、特に、女性に受け入れられる商品づくりを共に進めて、女性の立場から蓬田村の地域活性化に貢献したいと考えている。